

### 第3回公立大学法人福井県立大学評価委員会 概要

平成19年3月29日(木)

15:05～16:35

県立大学 交流センター 301多目的ホール

#### (出席者)

吉村委員長、熊澤委員、平泉委員、前川委員、楨村委員

#### 【議 事】

- (1) 公立大学法人福井県立大学中期計画について
- (2) 業務実績評価の方針について
- (3) 業務方法書について
- (4) 役員の報酬および退職手当の支給基準について

◎中期計画について、学長から説明があり、意見交換が行われた。

◎業務実績評価の方針、業務方法書、役員の報酬および退職手当の支給基準について、事務局から説明があり、意見交換が行われた。

#### 【主な発言要旨】

##### 1 公立大学法人福井県立大学中期計画について

(学 長) 評価委員会で計画が多すぎるのではないかとの意見が出たとお聞きし、大私課とも相談しながら大学として中期計画を作成した。

[以下、中期計画について説明]

(委 員) 資料P.4の「教育の情報化を～」とは、具体的にどういう意味か。

(学 長) ITの技術を持っている教員は増えているが、本当に高度の技術を持った教職員は少ない。これらの教職員にがんばってもらい、足りない場合には、さらにプロに近い人をお願いして、インターネットを通じて、欠席した学生に講義メモや宿題が送られるようなITを導入した教育を推進する。

また、福井キャンパスと小浜キャンパスを結ぶテレビ講義システムが既にあり、開学以来、情報を活用した教育が行われてきた。今後一層充実して活用したい。

(委 員) 将来的には各学生がIDを持って、教育を行うということになるのか。

(学 長) 既に学生の携帯電話に休講や緊急の情報が入るシステムを導入している。

- (委員) かつて技官的な職員を雇っていたが、IT技術は日進月歩。技官は役に立たなくなってしまった。そこで、外注して学生や教員へのガイダンス、システム設計を全部任せている。こうすれば、古くならず済む。
- (委員) 学生は、自分のノートパソコンを100%持っているのか。
- (事務局) 授業では、1人1台の環境が整っている。調査したわけではないが、パソコンもほぼ持っていると思う。
- (委員) 資料P.9の「大学情報の発信に関する企画・立案機能を～」の具体的なイメージは。
- (学長) 専門的な高度な技術を持っている教職員を集めてチームを編成する。いろいろなことをやっているのになかなか新聞やテレビに取り上げてもらえなかったが、最近は事務局のがんばりもあって取り上げてもらえるようになった。
- (事務局) 教員にもいるかもしれないが、事務局に広報のノウハウを持っている人がいるので、得意な人を集める。委員会方式で教授会にフィードバックすると時間がかかるので、チーム方式に改める。
- (学長) 部局代表だと、よく理解していない人が出てきて、足を引っ張るような発言をすることもありうる。そこで、チーム制で今まで以上にスピードと戦略性を持つ意味が込められている。
- (委員) チームというよりタスクフォースという方が分かりやすいかもしれない。
- (事務局) 従来の教授会中心のやり方ではないため、チームに選ばれた人が教授会の中で孤立し、機能しないおそれもある。
- (委員) 重点項目をはっきりされたので、中期計画としては、的が絞れて分かりやすくなっていると思う。
- (委員) 私の大学でも、従来は、教員は教員、事務職員は事務職員ということでやってきた。教員と職員が一緒になってやっていくことが重要である。
- GPは、委員会とは別にやっているため、勝手にやっているというイメージを持たれている。大学全学として取り組んでいるということを確認していただくにはどうしたらよいかを話している。
- (学長) トップダウンだけでなく、ボトムアップをうまく組み合わせないと、大学は動かない。
- (事務局) 教員主導のチームはうまくいく可能性が高い。
- (委員) チームの場合も教員だけでなく、事務職員が入っているかどうかポイントだと思う。
- (委員) どこか突破口を設けて戦略的に改革するとよい。教員に外部資金

を取らせてみるとよい。一番よいのは国際的な研究資金に挑戦させること。失敗するだろうから、そのとき事務局が専門的に支援できれば、信頼関係が生まれる。事務の専門的なサポートを受けないと研究資金が取れないというコンセンサスができる。事務職員のモチベーションの向上や教員の研究意欲の向上にもつながる。

(事務局) 資料 P.7 にそのような計画をあげている。学長自らが研究費獲得の指導にも乗り出している。4月からは研究推進課を組織して、外部資金獲得の支援も積極的に行う。

(学 長) この2年で科研費の申請・採択が2割増えた。今後は、国際的な観点からも努力していきたい。英語のできるレベルの高い職員もいるので、そのようなこともサポートしてもらえと思う。

(委 員) 資料 P.9 の「教員と事務職員がそれぞれの専門性を活かし～」とあるが、学長企画室みたいなものを作ってはいかがか。そこに、事務局長・部長クラスと研究者で構想力のある人を加えてはどうか。

(事務局) 経営企画課を設置して、学長の事務的なサポートをしていく。

(委 員) アメリカの研究所へ事務職員を6か月でも派遣して、資金獲得のノウハウを学ばせることでも、ずいぶん変わる。

(委 員) セクハラについては、どこの国立大学でもセクハラ委員会を置いており、外国から見れば、日本にはそんなにセクハラが多いのか思われている。表現が直接的過ぎるのかも知れない。

(事務局) 委員会は、セクハラ以外にもアカデミックハラスメントなども取り扱う。名称については、検討していきたい。

(委 員) 事務職員の評価は、どうなっているのか。

(事務局) 事務職員の評価は、県が評価システムを動かし始めており、それに連動して、一緒にやっていく。近い将来、昇給にも影響していくことになる。

(委 員) 評価の時代。のりしろをたくさん作っておいて、学長裁量で評価を反映できるようにしていただきたい。

(事務局) 教員の場合、業績で研究費を配分することにはコンセンサスが得られていない。自己評価でPRしていくことや、学部長のアドバイスを受けることはあるが、研究費や給与に反映させることまでは難しい。何をどう評価するか基準が難しく、簡単には機能しないと思う。学長裁量で研究費を配分する仕組み自体はある。

(学 長) 科研費に挑戦した人への配分など、学長裁量経費をもう少し増やしたいと考えており、インセンティブにつながると思う。

(委 員) インセンティブだけでなく、社会的な評価を受けられるような仕組みが必要。施設で金沢医科大学の教員がクラシックのコンサート

を開いた。施設の入所者を癒したということで、教員は大学でも評価を受けたし、地域でも評価を受けた。このような社会的な評価も考えられるとよい。

(事務局) 広報・地域連携チームで情報発信に努めて、外部資金が入ってくれば、よい回転につながると思う。

(委員) 学生生活の幅広い支援のところ、経済的な支援はあるのか。

(事務局) 現在でも、国の奨学金のほか、(経済的に困難な学生の)授業料減免制度や特待生の授業料減免制度がある。

(学 長) 学生の約3割が何らかの経済的支援を受けている。

## 2 業務実績評価の方針について

(委員) 前回の委員会で、数値的なものや学部ごとの特徴を中期計画に盛り込んでと申し上げた。中期計画に書かれなくとも、評価しやすいように、評価の段階で書いていただけるとありがたい。

(事務局) 数値化が可能なものとそうでないものがある。年次計画に落とし込むときに、可能なものについては工夫していきたい。

(委員) 外部資金といっても科研費だけではない。多角的な資金が全体的に分かるような自己評価をお願いしたい。

(委員) 前倒しでやっていくと結構忙しい。一番恐れるのは、評価倒れとなること。

(委員) 今後の進め方としては、来年も審議していくのか。

(事務局) 大枠を審議していただいたので、これによろしければ、次回以降の委員会で細かなことを相談させていただきたい。

## 3 業務方法書について

(委員) ルーチン化されたやり方があるということか。事務的に問題点はあるか。

(事務局) 特にないと考えている。

## 4 役員の報酬および退職手当の支給基準について

(委員) だいたいのところ横並びで決まっているのか。

(事務局) この基準より高いところも安いところもある。

(委員) 法人設立後に、法人から中期計画、業務方法書、役員報酬基準が正式に提出されるので、その際に意見をとりまとめることとしたい。